

馬だし祭り（富津市）－神の乗る馬の祭り－

江戸川大学社会学部ライフデザイン学科

准教授 高橋 克

はじめに

房総は、三方を海に囲まれ、一方は河川によって他領と隔てられ、温暖で豊かな土地柄である。そこには人々の暮らしに密接な祭りも多く伝承されている。

この稿では、富津市西大和田の吾妻神社に伝えられている「馬だし祭り」の概観、および東京湾と豊かな関わりを持つ人々の姿と祭りに込められた祈りの姿を報告するものである。

吾妻神社の起源

吾妻神社の起源は、日本武尊が東征の際、相模の走水から上総に渡ろうとした時、海が荒れていたのが弟橘姫が日本武尊の難に代わろうと海神に祈って海中に身を投じたところ、海が鎮まり、日本武尊は海難を回避し、無事走水の海を渡りきったという伝説がある。その後日譚として、海神に身を捧げて海を鎮めた弟橘姫の櫛が、富津市岩瀬の海岸に漂着したのを見つけた人たちが、馬の背に弟橘姫の遺品の櫛を載せて吾妻山にお祀りしたのが起こりといわれる。

吾妻神社の祭礼は、この伝承を再現し弟橘姫をお祭りするためとされ、祭りに馬は欠かせないことが「馬だし神事」のある理由だとも伝えている。

吾妻神社の馬だし祭り（富津市西大和田）

秋の祭りとして、かつての君津郡市から長生郡にかけては、神輿以前の古風な要素を示す神の乗り物として神馬の参加する祭りの分布が確認されている。

千葉県富津市西大和田に鎮座する旧村社吾妻神社（祭神：弟橘媛）の例祭は、毎年9月17日に行われる。「馬だし祭り」として同市岩瀬海岸でおこなわれるオメシ（神馬）の疾駆する神事に脚光が当てられて多くの見物人が集まる祭礼である。祭りの内容は「馬だし神事」だけでなく、「オブリ（御餐・魚振り）神事」や「神輿渡御」などを包括する大がかりなもので、もと吉野郷と言われた、上・近藤・八田沼・絹・西大和田・中・岩瀬の旧7ヶ村の鎮守である吾妻神社の五穀豊穰・海の安全・大漁祈願の祭礼である。

吾妻神社の馬だし祭り行事概要

（1）オブリ神事

オブリ神事は、青竹を一对に併せた中間に鮮魚（出世魚・イナダ）をつり下げて、白丁たちが神前に担ぎ上げる。その後、拝殿に安置してある神輿に鮮魚を飾り付け、飾り付けが終了すると拝殿の壺鈴に添えられている鈴紐によじ登り鈴を蹴ることで、祭典の幕開けとなる。

（2）馬だし神事

馬だし神事は、神馬の馬役はまだ暗いうち岩瀬の海岸に行き海水で身を清める。この時馬役は海中から二枚貝と黒い真石を拾い二枚貝の中へ石を入れてそっと身につけて持ち帰る。そして迎え役、口取りの若い衆と神馬の馬主のところに行き、馬を借りて岩瀬の海岸に連れていき海水で馬を清める。

この後、神馬は馬役の家の注連縄の張られた竹につながる。ここで、ユイアゲと呼ばれる腹巻きに、背には純白の布団を何枚も敷き重ねて飾られる。その後、岩瀬会館で会館の玄関に飾り付けたオブリの下で玄関に両前足を掛けさせて神馬の礼を執り、御神酒をあげ、吾妻神社を目指し出発する。吾妻神社の参道階段を駆け上り、神社神殿前で祭典をした後、御幣一对がその上に立てられる。馬出しを行う他村の馬は副神馬で「ダシウマ」、「キヤクウマ」、「トメウマ（すべての奉納の最後の馬）」と呼ばれ、腹にユイアゲ、背には友禅模様の布団を重ねて飾る。その上に立てる幣束は神馬より小さなもの二本。この役馬は全て雄である。神馬は、氏子地域を巡った後、岩瀬海岸で「馬だし」といって海岸を疾駆する。終了後は神社に還御する。

（3）神輿渡御・還御

神輿の渡御・還御は、オブリ神事により飾り付けが終了した神輿は、宮元の白丁が担ぎ、宮司により「御霊」を入れられると渡御が始まる。以後、旧村落ごとに担いで次々と引き継いで岩瀬海岸まで

を往復する。神輿は、旧村境で「仁義を切る」と称している「引き渡し式」を行う。岩瀬の浜では、御浜下りと称して神輿ごと海中に入り海水による清めを行う。御浜下りの後の吾妻神社への還御は夜になるのであるが、この時、氏子たちが各自手提げ提灯をかざして神輿とその行く道を照らし、神社に向かう。参加者の手提げ提灯に照らされながらの還御の神輿が神社に到着し、すべてが終了するのが午後九時を回る。

平野馨氏は、神輿の浜からの帰りには「対岸の横須賀市の走水神社（祭神弟橘姫）の氏子が海岸に出てお浜降りの提灯を望見し「上総の吾妻様がお立ち帰り」といって遙拝するのが習わし」であったと記しさらに吾妻神社宮司が走水神社に挨拶に行くことや、縄文期からの様々な痕跡が相模と上総の結びつきの深さを物語っていると述べている。東京湾を挟んで続く祭りの生命力の強さがうかがえる。



図 1 馬だし



図 2 神輿還御

祭礼の流れ

馬だし	オブリ神事・神輿渡御還御
3:00 神馬の馬役は、岩瀬海岸でご神体を採取する。	
5:00 岩瀬海岸で神馬（オメシ）を海水で清め、馬役介添え（長老）の家で神馬の装束を飾り付ける。	6:00 岩瀬地区のオブリの完成したものを岩瀬会館の玄関に飾る。
6:30 岩瀬地区では、岩瀬会館で神官、氏子総代らによって祭礼の無事を祈る式典が執り行われる。他の地区も同様におこなう。	吾妻神社奥の院において、神官・責任役員（氏子総代）によって神事祭典が執り行われる。
8:35 宮元と呼ぶ西大和田地区の白丁により副神馬は、参道鳥居まであがる。	8:00 絹地区の白丁と呼ばれる若者衆の登山開始。 神輿は拝殿に向かって回廊の左側に安置されている。
8:40 神馬は、会館玄関に飾り付けたオブリの下で玄関に両前足を掛けさせて神馬の礼を執り、御神酒をあげ、吾妻神社を目指し宿所の岩瀬会館を出発する。中の副神馬は、吾妻山宝幢寺と吾妻神社を結ぶ中間地点にて迎え待ち、神馬に従って吾妻神社に向かう。	8:20 絹の白丁たちは、御山開きの獅子頭2体を大人や子供が引っ張り合うようにしながらもみあって神社拝殿にあがり安置する。その後白丁は参拝、吾妻神社宮司によるお祓いを受ける。 8:30 獅子頭移動。参道の脇道を通って、山下の神社入り口に立つ幟脇の囃子山車の上に安置する。
9:30 神馬、鳥居先に到着。	8:40 岩瀬の神馬が出発すると同時に岩瀬のオブリに白丁たちが群がり、もみ合いながら出発する。 宮元のオブリ。神輿に飾る魚（イナダ）を、宮元の白丁たちが鳥居前に「オイサ、オイサ」のかけ声をかけながらおしくらまんじゅうの要領で腕を組み揉み合って登ってくる。神輿の正面に魚（イナダ）を飾り付ける。 9:00 宮元のオブリの神輿への飾り付けが終了。 9:05 宮元の白丁は、神輿が安置されている前の「宮元の溜場」に控え、食事をとる。
9:45 馬役が急な石段の参道に塩を撒き清めながら歩き、それに続いて岩瀬の白丁たちに手綱を取られた神馬が正面石段を一気に駆け上がる。副神馬は、参道鳥居まで駆け上がり、脇の道をお山にあがる。	
9:48 祭典。神殿前に馬をとどめて吾妻神社宮司によりお祓いをし、祝詞の後に御霊移しとして2本の幣束をX字に束ねた幣束（オンベ）を馬役に渡す。祭典終了。	

9:50 拝殿脇の脇宮栗島神社前の2本杉に神馬をつなぎ、幣束（オンベ）をつける。副神馬は、近くの木に繋がれここで幣束をつける。このあと、神馬は、吾妻神社宮司によりお祓いを受ける。



10:30 神馬、副神馬は神輿の渡御に先立ち脇参道を下山する。神馬は常に神輿の前を進み岩瀬海岸へ向かう。

10:50 神馬休所の中地区氏子宅に到着。

14:30 神馬、副神馬岩瀬の浜（旧称白州の浜）に到着。御浜出。

14:45 馬役が馬出しの場を塩で清めた後、馬出し開始。

神馬は1度だけ疾走。副神馬数回疾走。

15:25 馬だしの終わった神馬は、海に向かいお祓いをうける。その後、馬役は、氏子とともに直径1疋ほどで、深さ1疋ほどの穴を掘り、神馬の背の幣束を安置する。

15:39 神馬の幣束安置後、吾妻神社宮司が祝詞を上げ、塩、米、酒の順に穴に撒き、朝に馬役から渡された貝にはいった石は、人に気づかれないように穴に撒き入れる。

15:52 穴を埋め、終了。御神酒で乾杯。

16:00 神馬出発。吾妻神社へ帰還する。

10:05 岩瀬のオブリがあがる。

「オイサー、オイサー」と声を上げながら参道を練り拝殿にむかう。鳥居から中にはいるともみ合いをやめて、正面石段を駆け上る。

10:10 拝殿に着いたオブリは、神輿の表鳥居に付ける。この時、魚を神輿につけている間は参道の階段上を神輿のもとにあったオブリの青竹2本を使い交差して通行止めにする。

10:20 オブリの飾り付け終了。

手打ち終了後直ちに岩瀬の白丁たちが拝殿の壺鈴に添えられている鈴紐によじ登り鈴を蹴り鳴らすと、宮元の白丁たちが神輿を担ぎ出す。

拝殿向かって右側の神馬の前で神輿を上方に投げ頭上で受け止めるのを3回繰り返す。

10:30 課役の合図で、神輿が階段を下り始める。後に吾妻神社宮司が従う。

10:55 鳥居の手前で神輿を3回投げ上げ頭上で受け止める。

鳥居を出て、通称鳥居先に安置する。宮元の白丁たちは神殿前へ駆け上がりもどっていく。

11:00 神輿、宮元から絹への引継ぐ課役の仁義。地区毎に白丁たちが引き継いで神輿をかついで吾妻神社の氏子地区を廻る最初の引き継ぎ。

この後、神輿は絹、中、岩瀬の各地区を休憩と引き継ぎをおこないながら岩瀬海岸まで渡御する。

- 17:05 神馬吾妻神社到着。
 17:10 神馬御浜下りの次第を吾妻神社に報告し、手打ちにより終了。解散。



- 16:00 神輿、御浜上安置。点検。休憩。
 16:10 神輿、お浜出のため吾妻神社宮司によるお祓いを受ける。
 16:13 神輿、海に入る。
 16:50 神輿、浜にあがり、神輿は、海に正面を向けたまま後ろ向きに進んで祭場中央に安置。神輿洗い。
 17:17 神輿出発。
 「お浜出」が終わり、神輿は吾妻神社に向けて出発する。
 18:35 神輿、西大和田ガソリンスタンド前安置。ここでトンボをはずす。
 岩瀬から宮元への引継。
 ここからは、還御であり、この区間は「アゲバン」と呼ばれる地区の白丁が中心に担ぐ。
 18:50 神輿還御。
 役員、氏子が神輿とともに吾妻神社に向かう。手には、祭礼関係者、役員、課役、小頭、白丁および各家の名入り提灯を持ち、神輿にかざしたり足下を照らしたりして進む。
 20:50 神輿、吾妻神社拝殿前に到着。
 21:20 神輿安置後、宮元の課役による還御終了の口上。手打ち後、解散。還御は共同責任のため点検は行わない。下山は、混雑を避けるため、岩瀬、中、絹、宮元の巡におこなう。

馬だしの記録

筆者はかつて、君津市人見の人見神社の祭りで神馬が山を駆け上がり山頂の人見神社に詣でる馬だしを見たことがある。また、富津市大堀の神明神社でも馬だしが行われていたことをおぼろげながらに記

憶している。人に神社の馬だしの様子が昭和42年7月22日の写真として富津市立富津埋め立て資料館に飾られている。

馬だし祭りは、『日本民俗学』十五号(昭和35年12月)に発表された高橋在久の「馬だし祭り」と題された現在の富津市西大和田の吾妻神社の祭礼について報告されたことがある。これは、神の乗り物としての馬の存在は柳田国男『日本の祭り』にあるごとく衆知のことであるが、単なる神の乗り物としてだけでなく馬を疾駆させる馬だしの現存を報告したものであったが、そこには他の地域の馬だしについては触れられていない。

千葉県富津市近隣などを調べてみると、馬が祭りに参加することは多くあるが、「馬だし」といって馬駆けをする祭りは多くないようで、一宮町の玉前神社の「上総十二社祭り」の神幸で、神馬が幣束を鞍上に安置し九十九里の海岸を神幸の先頭に行く。

文献に残るものでは、『富津市史』に岩瀬のとなりの地区である富津市小久保の神明神社に昭和十年代まで吾妻神社同様のオメシ・オボリの神事がおこなわれていたとある。(『富津市史』1982 p.1544)

『富津岬』には同じ富津市篠部の立石神社で戦前の旧暦十月九日に五、六頭が走った馬だしがあったことが記されている。(『富津岬』2006 p.56)

また、『千葉県君津郡君津町誌 後編』では、千葉県内での例をあげ、人見神社の馬だしについての記述があり、その中に、房州方面では佐貫の鶴岡の天王様、吉野の吾妻様(神馬)、西川八幡様、大堀大六天王様、大堀神明様、飯野神社、貞元上湯江の三舟台、八幡の八幡神社、南子安の小安明神、三直の天王様といった所で馬だしが行われていたことが記されている。さらに、興味深いことに人見神社の馬だしの起源について、起原は詳ではないとしながらも、「飯野の領主、保科の殿様の先祖が大坂夏の陣に出陣して身に三創を受けたが、無事味方の陣へ引上げて抜群の手柄を樹てた姿を、そのまま十七ヶ村の鎮守妙見様に奉納したに始まると伝えられている。」としている。

また「女優望月優子主演、江原慎二郎等の助演の「米」といふ映画で、潮来に「馬出し」祭のある事を発見した。「馬出し」祭は、小糸川流域だけの行事で、全国他に類例がないと聞いていたので驚いた。」と茨城県に馬だしのあることに触れている。(『千葉県君津郡君津町誌 後編』1973 p.249~253)

その茨城県にある馬出しは、「麻生祇園馬出し祭」で茨城県行方市麻生の八坂神社を中心に古宿・新田地区で七月最終の土・日曜日に行われる祭りである。

この祭は、麻生藩の保護を受け、約三百年の歴史がある。旧藩政当時は、藩主を中心とし、武将として一朝有事の時も十分に役立つように、また足軽が馬を引くためにも、さらには、いざ戦場に立ち大軍の中にあっても馬が動じないための調教としての意義も込めて継承されてきた。現在では古宿・新田地区で執り行われてきている。二日目の本祭りでは、御祭神須佐乃男命が八岐の大蛇を退治した故事に基づき、神輿を御祭神須佐乃男命、駆け抜ける馬を八岐の大蛇に見立てせめぎあう神事が馬出しと呼ばれる。(麻生町郷土文化研究会 1994 41~43)

このように馬だしは、神話にちなんだものや武家の戦功に由来したり、農民の娯楽を兼ねていたようである。

おわりに

今回は、時系列に沿って各行事を配置した表によって馬だし祭りについての全体的な流れの再確認と、この祭りの持つ特徴を述べてきたが、複数の神事が重層的におこなわれ、一つの祭りとなっていることがわかる。

この祭りは、馬だしの神馬を担当するのが岩瀬の人々に限定されていることや、オブリを行う地区が決まっていること、神輿の受け渡し各地区の境で行われることなど、吾妻神社の氏子でありながら、地区ごとの独立性を感じさせる。

その独立性が影響したのか、文化財指定のされ方も独特であり、馬だし用具一式が「吾妻神社の馬だし祭用具」として昭和37年5月1日付けで有形民俗文化財に指定され、「吾妻神社オブリ神事」が平成4年3月31日付けで無形民俗文化財に指定されている。

今回の報告では、祭りの流れとしてすべての神事を時間軸の中に取り上げたのであるが、祭りは個々

の神事や行事のみで成り立つものではないという観点の筆者としては、このような文化財指定のあり方に疑問を感じる。祭り全体としての変わらない継続が望まれる。

なお、この稿は、2008年2月23日の東京湾学セミナーでの発表原稿に加筆訂正したものである。

参考文献：

- 麻生町郷土文化研究会 1994「八坂神社「馬出し祭」由来」 『麻生の文化』 第三号
 石上七鞆 1976「神輿と山車にはどんな意味があるか」 『日本民俗学の視点1 ハレ（晴）の生活』
 高崎正秀、池田弥三郎、牧田茂 編 日本書籍株式会社
 小倉 学 1982 『信仰と民俗』 民俗民芸双書九〇 岩崎美術社
 君津市史編さん委員会編 1998 『君津市史』 千葉県君津市
 君津町誌編纂委員会 1973 『千葉県君津郡君津町誌 後編』 君津町
 小林吉一 1976「祭はどのように営まれ、どんな意義があるか」 『日本民俗学の視点1 ハレ（晴）の生活』 高崎正秀、池田弥三郎、牧田茂 編 日本書籍株式会社
 郷田洋文 1953 「上総沿岸のシホフミ」 『日本民俗学』 第2号
 財団法人民俗学研究所編 1951 『民俗学事典』 東京堂
 須川邦彦 1956『海の信仰 下』 海洋文化振興株式会社
 高橋在久 1960 「馬だし祭り」 『日本民俗学』 15号
 田村 勇 1990『海の民俗』 桜井満編日本民俗学シリーズ9 雄山閣出版
 千葉県教育庁教育振興部文化財課編 2004 『ふさの国文化財総覧 第1巻』
 千葉県教育庁教育振興部文化財課編 2004 『ふさの国文化財総覧 第2巻』
 千葉県教育庁教育振興部文化財課編 2004 『ふさの国文化財総覧 第3巻』
 千葉県教育庁文化課 1983 『房総のまつり』
 行方市麻生商工会：<http://www.sopia.or.jp/aso/index.html> (2008.9.30)
 平野馨 1961 『稿本 房総のやまとたける』 房総民俗叢書1 房総民俗会
 平野滝治著『吾妻神社祭典行事の概要』
 富津市市史編さん委員会編 1982 『富津市史 通史』
 富津公民館東京湾学講座・富津霽の会編 2006『富津岬－東京湾口の自然と人生の年輪－』
 村武精一 1986 『祭祀空間の構造－社会人類学ノート』 東京大学出版会
 柳田国男 1956『日本の祭』 角川書店